京都大学アカデミックデイ 2014

『研究者の本棚』
ブックリスト

Dialog with the Public

＜目次＞

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本 ---------- 3

B 今ハマっている本（誰かとこの本について話したい）---------- 7

C 若者にお勧めしたい本 ----------11

D 自分の研究に関連して紹介したい本 ----------16

座談会・本トークの登壇者からの推薦図書 ---------- 21

研究者の本棚　「人文・社会科学者（地域研究者）の本棚」----------30

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『黒い虹―阪神大震災遺児たちの一年』（あしなが育英会編、廣済堂出版）※

①兵庫県南部地震の被害を目の当たりにしたことは、地震の研究をすることへの大きな動機づけになりました。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『地震と断層の力学　第二版』（C.H.ショルツ著、柳谷俊・中谷正生訳、古今書院）※

①英語版はゼミで必死に勉強した。自分の指導教員が思いを込めて翻訳している。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『精神と物質―分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』（立花隆・利根川進、文春文庫）※

推薦者１：

①ノーベル医学生理学賞を受賞した利根川進氏の研究内容を、立花隆氏がインタビュー形式でわかりやすく解説している好著。分子生物学のすごさを体感し、これを用いた研究をしたいと強く思ったきっかけとなった本です。

②跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科）「No. 5：100℃でも生育可能な超好熱菌」

推薦者２：

①分子生物学への興味を誘ってくれたとともに、研究者に対する憧れを抱かせてくれた本です。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

推薦者３：

①一流のジャーナリストが一流の科学者にインタビューをした貴重な一冊。

②寺村謙太郎（京都大学大学院工学研究科「No.51：CO2 を”ひかり”と”みず”でリサイクル！」

『沈黙の春』（レイチェル・カールソン著、青樹築一訳、新潮社）※

①低リスクであり、便利で使いやすいと考えられていたものが、場合によっては、生体濃縮され、人間を含めた生態系に毒性をもたらす可能性を示唆した歴史的な名著。批判もあるが、一度は読んでおきたい。

②佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科）「No.7：植物の薬用成分を効率的につくる」

『「中央ヨーロッパ」を求めて：東欧革命の根源を探る』（ジャック・ルプニク著、浦田誠親翻訳、時事通信社）※

① 1989 年に大学に入学し、東欧革命を見て旧東ヨーロッパの勉強を始めました。本書は、その頃に読んだ本ですが、今見ても読むに値する書物だと思います。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『春の祭典：第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』（モードリス・エクスタインズ著、金利光訳、みすず書房）※

①第一次世界大戦がヨーロッパ世界に与えた衝撃を、音楽などの文化の側面から捉えた本。悲惨な戦争体験が人々の心にいかに強い影響を与えるかという点が印象的でした。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『時空のさざ波－重力波を求めて―』（坪野公夫著、丸善）

①この本がきっかけで、大学院の入試の面接で重力波の話をしました。そのときは自分が重力波の研究をすることになるとは思ってもいなかったのですが。

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No. 11：重力波物理学の未来」

『学研の図鑑　宇宙』（学習研究社）

①宇宙すげー、ロケット格好良いなあ。小学校の理科の授業での太陽観測と合わせて、非常に刺激になった。天文ガイド（誠文堂新光社）を買うようになり、下手な天体写真を撮るようになった。

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No. 11：重力波物理学の未来」

『てんぎゃん』（岸大武郎著、集英社）

①「純粋な知的好奇心で動く！」ということの素晴らしさを教えてくれた本。南方熊楠は英科学誌 Nature に 51 報の掲載実績を持つ、現在においても日本人のレコードホルダー！和歌山県白浜町の「南方熊楠記念館」（隣の「京都大学付属白浜水族館」も併せて）は生物系研究者なら一度は行くべき聖地巡礼です。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No.13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『生態人類学を学ぶ人のために』（秋道智彌・市川光雄・大塚柳太郎編、世界思想社）※

①世界各地で人びとが自然環境とどう関わり生きてきたのかを、多くの研究者がフィールドワークをもとに描いた本です。高校生のときに本書を読んだことがきっかけで、発表者（泉）は大学や大学院で人類学を学びました。

②田暁潔／東直亮（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『死の病原体　プリオン』（リチャード・ローズ著、桃井健司・網屋慎哉訳、草思社）※

①狂牛病が猛威を振るった時代に出版された本。プリオンという未知の「何か」を探るべく、科学者たちが名探偵のようにパズルのピースを集めていく様は、まるでサスペンスのよう。これをきっかけに、科学者という仕事に興味を持った。

②諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）「No. 17：コンピュータで化学反応の世界を探る」

『ドラえもん』（藤子・F・不二雄著、小学館）※

①振り返ってみると、科学へのあこがれは小さい時に読んだドラえもんが最初のような気がします。2112 年のドラえもん完成までに、タケコプターは完成するのでしょうか？

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『物理の散歩道』（ロゲルギスト著、岩波書店）※

①日常の事象をさまざまな角度から考えることの面白さがわかります。お勧めです。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

“L'ecriture et la difference” (Derrida, J., Seuil) （**『エクリチュールと差異』**（ジャック・デリダ著、合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局）※

①この本に所収の「暴力と形而上学」という論文で、「他者の他者性を無視して、自らと同じものと見なすことは、他者に対する暴力ではないか」と考えた思想家 E. レヴィナスに対して、J. デリダは「そのような暴力がなければ、私たちは暴力があったということすら認知できないのではないか」と批判します。教員養成課程の大学に通っていた私は、この本を読んで「では教育とはいかなる営為なのか？」という疑問を持ち、研究を志しました。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“L’apparition du Livre” (Febvre, L., and Martin, H-J., Albin Michel) （**『書物の出現〈上〉〈下〉』**（リュシアン・フェーブル、アンリ=ジャン・マルタン著、関根素子他訳、ちくま学芸文庫）※

①書物というメディアがどのようにかたち作られたかを、社会史という視点から明らかにした古典とも言える本です。著者の L. フェーブルと H-J. マルタンは、私たちが知っているメディアが様々な「モノ」から出来ていることを、改めて気づかせてくれます。紙、インク、活版の歴史を辿るという彼らの視点は、私の研究では、パソコンやケータイ（そしてそれらが利用される場所）を「モノ」として捉えるという考え方に活かされています。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『ホーキング、宇宙を語る』（スティーヴン・W・ホーキング著、林一訳、ハヤカワ文庫）※

①なぜか家にあって、高校の時によく分からないながらもワクワクしながら読んでいたのを覚えています。かろうじて分かった相対性理論によると面白い現象がたくさんあって、これが全て科学的に正しいのかと思うと胸が熱くなりました。

②中村輝石（京都大学大学院理学研究科）「No.29：ニュートリノ最先端」

『現代倫理学入門』（加藤尚武著、講談社学術文庫）

①学部生のときに読んで倫理学を学ぶことにしました。現代の社会的問題を考える上で哲学が重要であることを教えてくれる本です。

②児玉聡（京都大学大学院文学研究科）「No. 31：医療や科学技術の倫理について考える」

『複合材料』（アンソニー・ケリー著、村上陽太郎訳、丸善出版）

①材料どうしを組み合わせると元の材料以上の性能が得られる仕組みが書かれている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『耐熱合金のおはなし』（田中良平著、日本規格協会）

①高温耐熱材料がいかに CO2 削減、省エネルギーに寄与しているか、どのようにして材料設計が行われているのかなどについて初心者にもわかりやすく書かれた本で、非常に感銘を受けた。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No.39：炎を制する－超耐熱構造材料」

『モモ』（ミヒャエル・エンデ著、大島かおり訳、岩波書店）※

①時間とは何か、クロノスとカイロスの違い、など子供のころは子供なりに、大人になってからも改めて考えさせられる本。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の３次元自由視点映像」

『宇宙からの帰還』（立花隆著、中公文庫）※

①小学生の自分にとって、ロボットが戦う SF アニメの世界でしかなかった宇宙という環境について、まったく異なる見方を与えてくれたことを強く覚えている。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の３次元自由視点映像」

『海底２万マイル』（ジュール・ベルヌ著、加藤まさし訳、講談社青い鳥文庫）※

①未知の領域である海底世界を、リアルに描写された潜水艦で冒険する SF 小説。後になって、約 150 年前に書かれた作品と知って驚いた。

②延原章平（京都大学大学院情報学研究科）「No.40：水中生物の３次元自由視点映像」

『感情の自然』（山形頼洋著、法政大学出版局）

①精緻な議論が端正な日本語によって展開され、それと同時に、批判的精神と哲学的独創性が見事に調和した著作です。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎―フランス現象学の挑戦」

『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦著、新潮文庫）※

①高校時代、1 年間のホームステイ留学中に読んだ本。自分が日本人であることを忘れて現地社会の一員になるぞという意気込みで留学したが、留学先は多民族社会のマレーシア、しかもホームステイ先は民族的マイノリティで、「現地社会の一員になる」というのはどの人たちと同じになることなのか悩んだ。本書で「アメリカでは日本人らしく振舞うのが現地社会に馴染むことだ」と読み、その意味を考えることが後の研究につながった。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『殺される側の論理』（本多勝一著、朝日文庫）※

①子どもの頃から常識や慣例となっていた考え方や行動の一部は、実は米国の常識や慣例をそのまま持ち込んだものだという見方を本書で知った。ローマ字で名前を書くときに姓・名ではなく名・姓の順に書くこと、数字を書くときに 4

桁ごとではなく３桁ごとにカンマで区切ることなどをはじめ、１つ１つの言葉をどう書くかに書き手の意識が反映されるという考え方を知り、発せられた言葉の行間を読む習慣が身についた。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『利己的な遺伝子』（リチャード・ドーキンス著、日高敏隆他訳、紀伊國屋書店）※

①進化や自然選択を遺伝子の視点から解釈した有名な本。完読できたかの記憶は定かではないですが、「生物は遺伝子によって利用される"乗り物"に過ぎない」というセンセーショナルな表現に、生命の本質は何なんだろうという興味を抱いたのが、今の仕事につながっているかもしれません。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『ブワナ・トシの歌―東アフリカの湖と村びとたち』（片寄俊秀著、社会思想社）※

①アフリカに興味を持ち始めた頃、この本をきっかけに、アフリカへの現地調査（フィールドワーク）への憧れをもつようになりました。フィールドワーカーが直面する、四苦八苦や、苦労・感動の物語が描かれています。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『にほんご』（安野光雅編、福音館書店）※

①幼稚園の頃、この本を手に取り、多様な世界の文字と言語、世界の民族、日本手話、点字、識字の普及などを知り、言語に関心をもった最初の本です。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『言葉を復元する―比較言語学の世界』（吉田和彦著、三省堂）

①私が京都大学にくるきっかけとなった本です。元指導教官による著作。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

『サンスクリット文法』（辻直四郎著、岩波書店）※

①インドの古典語サンスクリットの授業で参考図書だった本。担当の先生の丁寧な説明が忘れられません。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

B 今ハマっている本（誰かとこの本について話したい）

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『病気はなぜ、あるのか―進化医学による新しい理解』（ランドルフ・M. ネシー、ジョージ・C. ウィリアムズ著、長谷川真理子他訳、新曜社）※

①今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

“Textbook of Evolutionary Psychiatry: The Origins of Psychopathology” (Martin Brune, Oxford University Press)

①今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『進化精神医学―ダーウィンとユングが解き明かす心の病』（アンソニー スティーヴンズ、ジョン・スコット プライス著、小山毅他訳、世論時報社）※

①今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『天才と分裂病の進化論』（デイヴィッド ホロビン著、金沢泰子訳、新潮社）※

①今回の出展のテーマと平行して、進化精神医学分野の研究をしており、そちらの研究に関連する文献

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『科学はどこまでいくのか』（池田清彦著、ちくま文庫）

① コメントなし。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No.3：過去の地震にまなぶ」

『猫楠』（水木しげる著、角川書店）

①和歌山県の「南方熊楠記念館」を訪れた際に購入した本。熊楠の奇人変人さが水木しげるによって更にアレンジされており、とても楽しんで読むことが出来ました。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『テラフォーマーズ』（作：貴家悠作、画：橘賢一、集英社）

①ストーリーについては言及しませんが、とにかく作中に珍獣が解説付きで登場するのがアツい！登場した生物は欠かさずネット検索で調べて、解説が本当かどうかを確認しています（笑）

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『人と動物の人類学』（奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋編、春風社）※

①日本でも、アフリカでも、野生動物による被害や社会問題が増えています。それらの問題を解決するために、どのような対策をとったら良いのでしょうか。本書は人類学の視点から、世界各地のフィールドで得た一次資料によって、人と動物の関係を描いています。本書はわたし（田）に、歴史・文化・社会的な文脈のなかで本来あった、人と動物の多様なかかわりを深く考えさせました。人と動物の関係について興味がある方におすすめします。

②田暁潔／東直亮（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』（リチャード P ファインマン著、大貫昌子訳、岩波書店）※

①研究って楽しいんだな！という純粋な気持ちを思い出させてくれる本。小難しい話は出てきません。物理と縁遠い人にも楽しんでもらえる一冊。

②諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）「No. 17：コンピュータで化学反応の世界を探る」

『弱いつながり――検索ワードを探す旅』（東浩紀著、幻冬舎）※

①学術書として見た場合の細かい内容については措くとして、この本で東浩紀さんが現代社会に投じたメッセージは真剣に受け取られ、考えられるべきだと思います。そのメッセージは、「現代のインターネットの検索システムでは、世界は人々の関心の範囲に収束し、そのような世界で人々は充足してしまう。それがまずいと思う人は、検索ワードを拡げるために旅に出て、観光客になろう」というものです。皆さんは、これにどう応えますか？

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No. 28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“Adieu: à Emmanuel Lévinas” (Derrida, J., Galilée)（**『アデュー――エマニュエル・レヴィナスへ』**（ジャック・デリダ著、藤本一勇訳、岩波書店）※

①E. レヴィナスの死を受けて、J. デリダがレヴィナスの思想を「歓待（他者の受け入れ）」というキーワードから考察した本です。私としては、この本に「ハマってる」というよりも、私を研究の途へと誘った二人が、紆余曲折を経た私の現在のネットカフェ研究で、最後に問題になることをあらかじめ知っていたかのように先回りされたという意味で、むしろ「ハメられた」気分です。しかし、改めて「おもてなし」とは何なのでしょうか？

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No. 28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“Christian Moderns：Freedom and Fetish in the Mission Encounter” (Webb Keane, University of California Press)

① カルヴァン派の宣教師が東南アジアでの布教を通して直面した問題を分析していますが、この本を読むと今日プロテスタント的考え方がいかに広く（非キリスト教徒社会にも）行き渡っているか思い知らされます。わたしたちが日々なにげなく使う「近代」や「自由」という言葉の裏にも、プロテスタント派キリスト教の言語観や世界観の影響を認めることができるかもしれません。（今村）

②今村真央、伊賀司（京都大学東南アジア研究所）「No.33：東南アジア研究所は何を研究している？」

“The Language of the Gods in the World of Men: Sanskrit, Culture, and Power in Premodern India” (Sheldon Pollock, University of California Press)

①近代以前、製本技術も未熟な時代に、サンスクリット語やラテン語は「神の言葉」もしくは「世界語」として特権的な立場にあり、極めて広い地域に及ぶ影響力を持っていました。しかしその後、近代においてそのような言語は一気に衰退してしまいます。この衰退とともに現れたのがいわゆる「現地語」や「国語」ですが、この歴史的変遷はいかにして可能になったのでしょうか。「現地語」がいかにして形成され公認されるようになったか、世界史的な視点から分析しています。（今村）

②今村真央、伊賀司（京都大学東南アジア研究所）「No.33：東南アジア研究所は何を研究している？」

『私とは何か 「個人」から「分人」へ』（平野啓一郎著、講談社）

①「個人」とか「自分」いうことについて、平易なことばで面白い着想点から考察している。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『ミツバチの会議―なぜ常に最良の意志決定ができるのか』（トーマス・シーリー著、片岡夏実訳、築地書館）※

①北野正雄先生からご紹介いただいたのですが、はまっています。１００匹を超える探索ミツバチが、次の巣場所の候補を選んできて、それぞれが意見を出し合い、「議論」の上で、原則全員一致で決定しているなんて、驚きでしょう？

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『元素戦略』（中山智弘著、ダイヤモンド社）※

①「材料を制する者が世界を制する。」元素を原子スケールでマニピュレートすることで、これまでにない素晴らしい材料をいかに作り上げるかを考えさせられる。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No. 39：炎を制する－超耐熱構造材料」

『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（佐藤健志著、文藝春秋）※

①子どもの頃から好きだったウルトラマンなどのテレビ番組や映画の背景に、アメリカの傘の下で平和を享受しているという日本社会の意識などが読み解けるという本。何気ない大衆娯楽でも分析の仕方しだいで時代性や社会思想を読み解くことができることに驚き、それまで考えもしなかった自分の意識を当てられたことやその手際の鮮やかさに驚く一方で、その読み解きに違和感が残り、別の読み解き方ができないかとずっと考えている。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳、NTT 出版）※

①1990 年代頃の大学生の必読書という雰囲気があった。中身をよく読まずに「国民とは幻想の共同体である」という主張だと誤読されたりもしたが、「正真正銘」のナショナリズムは排他的ではなく自己解放をもたらす原理であるとしてナショナリズムを肯定的に捉えている。21 世紀に入って世界各地で排他的なナショナリズムが勢いを増しているように見えるが、それでも本書の議論はなお有効なのか、今こそ改めて考えてみたい。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『数学はなぜ生まれたか？』（柳谷晃著、文春新書）※

①言語と数学、科学と言語、一見して遠い分野に聞こえるかもしれない。しかし、私が今挑んでいる研究は、無文字社会、伝統社会を維持している社会での数概念や、自然認識とその実生活への応用である。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話　上・下』（マーク・プロトキシ著、屋代通子訳、築地書館）※

①民族植物学者である著者自身のフィールドワークに基づく物語。植物や自然を利用して食用や新薬にしていく過程、癒しの植物、現地の植物利用から現代社会の実例まで記述されている。呪医との出会いを求めて南米アマゾンを舞台にした物語。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『カラー図解 アメリカ版 大学生物学の教科書 第２巻 分子遺伝学（ブルーバックス）』（デイヴィッド・サダヴァ他著、石崎泰樹他監修、浅井将他訳、講談社）※

①アメリカの大学で使われている生物の教科書から分子遺伝学分野を抽出して翻訳したものです。え？大学の教科書？なんだか難しそう。と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、読んでみると以外にもすんなり内容が頭に入ってきます。高校の教科書や図説では物足りないなと感じている高校生、高校で生物の勉強は終えてしまったけれどもちょっと興味があるなーという社会人の方、幅広い方に楽しんでいただける一冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『宗教生活の原初形態＜上＞＜下＞』（エミル・デュルケム著、古野清人訳、岩波書店）※

①長らく読みかけの本。全体像がつかみにくくて悩んでいますが、個々の説明は考えさせられます。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

『金枝篇』（J. G. フレイザー著、吉川信訳、筑摩書房）※

①民俗学者・柳田國男にも影響を与えた本。人類学の傑作と言われています。自ら現地調査を行っていない点がしばしば批判の対象となりますが、著者はギリシア・ローマの古典学者でもあります。その方面の知識量は絶大です。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

C　若者にお勧めしたい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『縛られた巨人―南方熊楠の生涯』（神坂次郎著、新潮社）※

①若者には、かつていた（または今もいる）すごい「学者」の人生伝を読んで触発してもらいたい。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『完全なる証明―100 万ドルを拒否した天才数学者』（マーシャ・ガッセン著、青木薫訳、文藝春秋）※

①若者には、かつていた（または今もいる）すごい「学者」の人生伝を読んで触発してもらいたい。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1: 食と生薬による健康」

『岩波ジュニア科学講座〈第８巻〉変動する地球』（斎藤靖二・綱川秀夫著、岩波書店）※

①地球科学の全体をざっくり学ぶのによいと思います。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No. 3：過去の地震にまなぶ」

『極限環境の生き物たち』（大島泰郎著、技術評論社）※

①極限環境に生息する微生物を体系的に、専門外の方にもわかりやすくまとめられている。生物がいかに多様であるかが実感できる。

②跡見晴幸（京都大学大学院工学研究科）「No. 5：100℃でも生育可能な超好熱菌」

『文明崩壊』（ジャレド・ダイアモンド著、楡井浩一訳、草思社文庫）※

①イースター島から現代中国までの世界中の社会・文明を取り上げ、文明崩壊の原因について縦横無尽に語る本。前作『銃・病原菌・鉄』と併せ、是非一読をお勧めしたい本。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

“On the Electrodynamics of Moving Bodies” (Albert Einstein)

①本ではなく論文（原論分の英訳版）だが，こんな風に新しい理論が作られるのか！と感動する。
http://www.fourmilab.ch/etexts/einstein/specrel/www/

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

“Current Biology” (Cell press) ※

①生物学全般を扱う隔週刊の学術雑誌です。なかなかの頻度で、一般目線からも興味深い論文（例.「フンコロガシは天の川を目印に移動する」「タコの足はなぜお互いに絡まらないのか？」「イカにも痛覚がある」「メスが雄性生殖器を持つ虫がいる」）が掲載されます。インターネット等で日本語の要約記事を読むのもいいですが、原著論文を英語で読むとまた違った味わいがあります。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『ぞりん』（井口尊仁・石黒謙吾著、扶桑社）

① 「ぞりん」というのは、ゾウとキリンを組み合わせた CG のことです。この本は、そんな架空の動物の写真集です。これは若者というか、未就学のお子さんを持つお父さんお母さんにオススメです。以前、知り合いの子供（当時２歳くらい）にプレゼントしたら非常に気に入ってくれて、動物園に行くたびに「ぞりんはどこ？」と言って両親を困らせ、僕のところにクレームが入りました（笑）

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『京大式　フィールドワーク入門』（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所著、NTT 出版）

①人類学や地域研究のフィールドワークにおいて、自分の研究感心を解明するために、現場で得られた情報をどう整理すればよいのか。本書は、そのことを解説した入門書です。本書の大きな特徴は、論文を読んだだけではわからないような、研究者の試行錯誤のプロセスを示していることです。発表者（泉）は、大学院で本格的に研究やフィールドワークをはじめるときに本書を参考にしました。

②田暁潔／東直亮（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『二人で紡いだ物語』（米沢富美子著、中央公論新社）※

①元日本物理学会会長の米沢富美子先生の自伝（武勇伝）。研究に行き詰った時、研究と家庭の両立に悩んだ時、たくさんの勇気をくれる本です。たまに飛び出る旦那様の名言が秀逸。

②諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）「No.17：コンピュータで化学反応の世界を探る」

≪中学や高校の歴史の教科書・資料集・用語集≫

①外国人さんと話すときに、自国の歴史や文化・その人の国や周辺国の歴史や文化を知っていると話が弾みます。理系文系関わらず、外国人さんと関わるならば、お勧めです。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『虚数の情緒』（吉田武著、東海大学出版会）※

①考える力を持った人を鍛え上げたいと言う著者の情熱がほとばしる逸品です。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『ウィーバー　分子生物学』（ロバート・F.・ウィーバー著、 杉山弘他監訳、伊藤伸子他訳、化学同人）※

①百科事典のように分子生物学に関する事項について、実験データに基づいて詳しく書かれた専門書です。特に、専門知識を深めるための指針として、分子生物学を志す若い研究者に本著を推薦します。

②板東俊和（京都大学大学院理学研究科）「No. 25： DNA オリガミを使ってできること」

“The House of Earth” (Buck, P., S., Moyer Bell and its subsidiaries) (**『大地（一）（二）（三）（四）』**（小野寺健訳、岩波文庫）※

①著者の P. バックがノーベル文学賞を受賞した小説で、私は大学生のときに、一週間ばかり講義そっちのけでこの本を読んでいました。歴史に翻弄される近現代の中国の農民の生活と、彼らの生活の糧である大地や家をめぐる叙述の苛烈さについて様々に心を巡らせてみてください。加えて、インターネットで覆われたとされるこの世界で、人々の生活について知ったり考えたりする意味を、改めて考えてみてほしい、とも思っています。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

“Global Cinderellas: Migrant Domestics and Newly Rich Employers in Taiwan” (Lan, P-C., Duke University Press)

①台湾国立大学の P-C. ランさんによる、台湾の新中間層の家族と、そこで家政婦として雇われるフィリピン人・インドネシア人女性の生活についてのフィールド・インタビュー調査をまとめた本です。少子高齢化に歯止めがかからず、今まで家族が担ってきた様々な機能をアウトソーシングしつつある日本にとって、アジアの他の先進国・先進地域でなされてきた「外国人受入」にかんする調査は、先例として学ぶに値するものだと思います。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『宇宙素粒子物理学』（C・グルーペン著、小早川恵三訳、丸善出版）※

①宇宙・素粒子の最先端な面白い話がだいたい書いてあります。宇宙や素粒子に進もうかなと考えている学生さんは一度読んでみて下さい。楽しそうな分野が多すぎて進路を決めるのが悩ましくなります（笑）

②中村輝石（京都大学大学院理学研究科）「No. 29：ニュートリノ最先端」

『素粒子の世界』（秋本祐希著、洋泉社）※

①宇宙素粒子の最先端の実験がかわいいイラストつきで（←重要）色々紹介してあります。素粒子実験に興味があるなら

とっても参考になります。ちなみに、私が博士号を取得したNEWAGE実験についても書いてあります。

②中村輝石（京都大学大学院理学研究科）「No. 29：ニュートリノ最先端」

『雪』（中谷宇吉郎著、岩波文庫）※

①雪の結晶を最初に人工的に実現した、中谷先生の話は聞いたことがおありかもしれませんが、その研究のエピソードは、とても楽しいです。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『物理学はいかに創られたか』（アインシュタイン、インフェルト著、石原純訳、岩波書店）※

①アインシュタインが、物理学を中心にした自然科学がどのように発展してきたかを、ほんとうに簡明に書いてくださった本です。その簡潔さには感動します。非常におすすめです。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No.36：光子のふしぎと量子情報科学」

『航空の世紀』（吉川康夫著、技報堂出版）

①航空機における耐熱材料の重要性を系統的に理解するのに最適の書。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No.39：炎を制する－超耐熱構造材料」

『明文術 伝わる日本語の書きかた』（阿部圭一著、NTT出版）※

①日本人で論理的でわかりやすい日本語が書ける人は多くありません。この本は伝わりやすい日本語の書き方を重点的にレクチャーしてくれます。大学のレポートや小論文などにおすすめです。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No. 41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『思考する機械コンピュータ』（W.Daniel Hillis著、倉骨彰訳、草思社）※

①コンピュータ初学者に、コンピュータの原理から応用たる人工知能までわかりやすく解説しています。この本を読んでおくとその後の勉強にも役立ちます。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No. 41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『告白』（アウグスティヌス著、服部英次郎訳、岩波書店）※

①自分の罪と対峙しつつ、神との対話のなかで、真理を真摯に探し求める姿は、心打たれると同時に、ヨーロッパの伝統的な思索のモデルのひとつを知るのに役立ちます。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎―フランス現象学の挑戦」

『ツァラトゥストラ』（ニーチェ著、手塚富雄訳、中央公論新社）※

①「より高い身体を君は創造しなければならぬ」。旧来の哲学的知の終焉を宣言し、新しいそれを告知する書です。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎―フランス現象学の挑戦」

『こころのふしぎ　なぜ？どうして？』（村山哲哉監修、高橋書店）

①「こうすべき」「これはだめ」と理解はしていてもそのことがなかなか納得できずに適切に行動できないという経験は誰にもあるだろう。本書は、それを善悪や正邪からではなく人間の心の不思議という観点から解き明かし、適切に行動する道を探る。しかも、子どもにもわかるように説明する工夫が凝らされている。児童向けの本だが、大人になってからも読み返したい一冊。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『人間の大地（上・下）』（プラムディヤ・アナンタ・トゥール著、押川典昭、めこん）※

①海外旅行が手軽になったせいもあって東南アジアはずいぶん身近になった。しかし、一方的に親近感を抱いても、東南アジアの人々が日々何を考えているかがわかるわけではない。それを補うには現地の小説を読むのがいい。本書とその続編の『すべての民族の子』や『足跡』は、オランダによる植民地支配下のインドネシアが舞台になっているが、独立後の現在にも通じるものがある。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No.43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『偶然と必然』（ジャック・モノー著、渡辺格。村上光彦訳、みすず書房）※

①コメントなし

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『はじめての言語学』（黒田龍之介著、講談社現代新書）※

①「言語学とは何か」を、小中高生や専門外にもわかりやすく、適格に書かれた良書。言語はあまりに身近で、外国語学習と言語学を混同する場合が多い。言語学に関する偏見や言語に関する先入観を取り去り、さらに学びたい分野に関しては参考書が列挙されている。1日で読める楽しい入門書。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『絶滅していく言語を救うために―ことばの死とその再生』（クロード・アジェージュ著、糟谷啓介訳、白水社）※

①世界には消滅の危機に瀕する言語が無数に存在します。消滅危機言語に関する見解も学者によって様々です。この本を通じて、世界の言語の数、多様性、どういうきっかけで、どのように言語が消滅していくのか、消滅危機言語に対して我々は何をすべきか、何ができるのか、考えるきっかけを与えてくれます。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『名もなきアフリカの地へ』（映画）

①ケニアを舞台にした映画、ユダヤ人迫害をのがれ、ケニアの農村へ移り住む親子と現地の人々の物語。外国語アカデミー賞受賞。ユダヤ人少女がケニア農村部の子供たちと言語・文化ともに打ち解けていく姿が印象的。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No.47：言語多様性 vs.生物多様性」

『どんなかんじかなあ』（中山千夏著、イラスト：和田誠、自由国民社）

①ヒト遺伝教育は何を目指すのか？一番最後にドキッとする絵本です。今までに読んだ絵本の中で一番ラストが印象に残る本でした。主人公の男の子がお友達の立場に立って、いろいろな想像をめぐらせて体験していきます。本を読み進めていきながら、主人公の男の子と一緒にいろんな人の立場、感じ方を想像してみると、読み終わったときに自分の感覚や世界がちょっと広がったような、不思議な感覚になります。お子さんだけではなく大人の方にもぜひ読んでいただきたい一冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

“LIFE: The Science of Biology (10th)” (David Sadava et.al, W.H. Freeman)

①『大学生物学の教科書』の原本（最新版）。大学時代に勉強しておけば良かったと後悔。でも、今からでも遅くはないはず！

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『キャンベル生物学』（N.A.キャンベル著、小林興監訳、伊藤元己他訳）※

①スーパー高校生はこれで勉強している！あらゆる分野の皆さんが、一度は目を通した方が良いのかもしれません。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『若きウェルテルの悩み』（ゲーテ著、高橋義孝訳、新潮社）※

①高校1年生の時に読んで、世の中こんなすごいものがあるのかと思わされた本です。途中で挫折しそうになりますが、最後まで読んだ人にはそれなりの感動が待っています。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

D　自分の研究に関連して紹介したい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『食べものとくすり―食の薬効を探る』（京都健康フォーラム監修、大東肇編、建帛社）※

①本研究プロジェクトメンバーによる記事が掲載されている書籍。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

“How Animals Heal Themselves” (Caroline Ingraham, Ingraham Trading Ltd)

①本研究プロジェクトメンバーによる記事が掲載されている書籍。

②後藤幸織（京都大学霊長類研究所）「No.1：食と生薬による健康」

『日本被害地震総覧 599-2012』（宇佐美龍夫他著、東京大学出版会）※

①日本の 1400 年間にわたる被害地震のカタログ。

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No. 3：過去の地震にまなぶ」

“The Orphan Tsunami of 1700—Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America” (Atwater et.al.)

①英語、日本語、くずし字、地質学、地震学、歴史学が入りまじったおもしろい報告書。

http://pubs.usgs.gov/pp/pp1707/

②加納靖之（京都大学防災研究所地震予知研究センター）「No. 3：過去の地震にまなぶ」

『記憶力の正体』（高橋雅延著、ちくま新書）※

①記憶についての心理学的研究が、わかりやすく紹介されています。

②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No. 6：心の構えを切り替える心の働き」

『意識のなかの時間』（エルンスト・ペッペル著、田山忠行訳、岩波書店）※

①心と時間の関係について科学的に考える方法を提示しています。

②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No. 6：心の構えを切り替える心の働き」

『脳のなかの幽霊』（V. S.ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー著、山下篤子訳、角川書店）※

①心と脳の関係を考えるための手がかりを与えてくれる良書。

②齊藤智（京都大学大学院教育学研究科）「No. 6：心の構えを切り替える心の働き」

『植物で未来をつくる』（松永和紀著、化学同人）※

①遺伝子組換え作物というと不安だという声を良く聞くが、その技術のもつ可能性をもっとしってほしいという日本人研究者の声をインタビューした本です。植物科学を目指す若者に是非読んで頂きたいと思います。

②佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科）「No.7：植物の薬用成分を効率的につくる」

『量から質に迫る：人間の複雑な感性をいかに「計る」か』（往住彰文監修、村井源編、新曜社）※

① 音楽や文学、思想を数量化することは可能か？人間の文化的営みを「科学的」に分析することを試みた本。

②福田宏（京都大学地域研究統合情報センター）「No.10：音楽から地域を語れるか？」

『重力波をとらえる』（中村卓史・三尾典克・大橋正健編、京都大学学術出版会）

①この本の出版後も様々な研究の発展があるが、重力波を（もうすぐ）とらえるためのバイブルとしていつもそばに置いておきたい。

②田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）「No.11：重力波物理学の未来」

『トマトが野菜になった日―毒草から世界一の野菜へ』（橘みのり著、草思社）※

①わずか 200 年ほど前までは毒草として扱われていたトマトが、世界一の生産量を誇る野菜になるまでの歴史がまとめられた著書。専門書ではないが、私たちが普段食しているトマトがどのように世界中に広まり、栽培されるようになったのかがまとめられている。

②柴田大輔（京都大学大学院農学研究科）「No. 12：トマトって、なに？」

『からだにおいしい野菜の便利帳』（板木利隆著、高橋書店）※

①近年、スーパーの野菜売り場には非常に多くの品種の野菜が並ぶようになってきました。それぞれが味も香りも食感も多彩で、どれを選んでよいのか、どんな調理法がよいのか迷ってしまいます。本書は代表的な野菜について、様々な品種の特徴を比較し、おいしい調理の仕方なども含めて紹介しています。こんな品種もあったのか、と野菜の世界を探検できる、一家に一冊、お薦めの本です。

②柴田大輔（京都大学大学院農学研究科）「No. 12：トマトって、なに？」

『波打際のむろみさん』（名島啓二著、講談社）

①最初は人魚系ギャグマンガだとタカをくくっていたら、意外にも魚の形態や生態、珍魚にまつわる迷信などを上手く使ってギャクを展開していて、感服致しました。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No.13：お腹の中で子供を育てるサカナ」

『モーラル・エコノミー――東南アジアの農民叛乱と生存維持』（ジェームス・C・スコット著、高橋彰訳、勁草書房）

①本書は、東南アジアの農村で起った反乱を分析して、農民の社会・経済の特質であるモーラル・エコノミーを指摘しています。その大きな特徴は、所得を大きくすることよりも、人びとの社会関係や生存維持を重視することです。このことは、発表者たちが調査するアフリカの多くの社会でも指摘されていて、この考えをもとに社会の発展のあり方が議論されています。日本の社会を考えるうえでも参考になるのではないでしょうか。

②田暁潔／東直亮（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『遊牧と定住の人類学―ケニア・レンディーレ社会の維持と変容』（孫暁剛著、昭和堂）※

①近代化、貨幣経済が浸透するなかで、アフリカの牧畜社会は消えてゆくのだろうかという疑問を抱いて調査を始めた発表者（田）が、フィールドで出会ったのは、牧畜文化に高い誇りをもって生きているマサイの人びとでした。本書で紹介されるケニア北部におけるレンディーレ社会の人びとも自然・社会環境の変化に柔軟的に適応し、変化しながら「遊牧の生き方」を続けてきました。牧畜社会をもっと知りたい方にぜひ！読んでもらいたい一冊です。

②田暁潔／東直亮（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／京都大学アフリカ地域研究資料センター）「No.14：東アフリカ牧畜民：サバンナを生きる」

『ファインマン物理学』（R・P・ファインマン著、坪井忠二訳、岩波書店）※

①なんというか、「人間的」な物理の教科書だと感じています。物理を目指す人は読んで損は無いと一冊（セット？）です。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No.21：原子核からのぞく世界」

『基礎ケミカルバイオロジー』（杉山弘•板東俊和著、化学同人）※

①DNA、RNA、タンパク質の構造と機能に関して、生物、化学、薬学的な視点から分かりやすく説明したケミカルバイオロジーの入門書として本著を推薦します。

②板東俊和（京都大学大学院理学研究科）「No.25： DNA オリガミを使ってできること」

"Hello My Big Big Honey!: Love Letters to Bangkok Bar Girls and Their Revealing Interviews" (Walker, D., and Ehrlich, R., S., Last Gasp of San Francisco)

①カナダ出身で様々なメディア活動に従事する D. ウォーカーとカリフォルニア出身のジャーナリスト R. S. エーリッヒが著した異色の本です。前半部分では、バンコクのバー・ガール1（売春街で働く女性）たちに宛てられた白人男性か

らの「ラブ・レター」を載せ、後半部分では彼女たちがそのような手紙をどう捉えているのかインタビューしています。実は、インターネットカフェでも同じことが起こっていることをお話しようと思っています。

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

"Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines" (Foucault, M., Gall)（**『言葉と物―人文科学の考古学』**（M フーコー著、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社）※

①思想史、あるいは歴史書としても読むことができる、M. フーコーの代表的著作です。彼はこの本で、私たちがよく知っているはずの「人間」という形象は、実はそれほど長い歴史を持たない、と論じました。このような考え方は、私たちにとってあまりに自明（当たり前）のものになったあるものを反省的に捉える際に、非常に役に立ちます。例えば、日本におけるインターネットカフェが、今あるかたちになったのはいつ頃からでしょう？

②平田知久（京都大学大学院人間・環境学研究科）「No.28：アジア・移動・インターネットカフェ」

『元素戦略』（中山智弘著、ダイヤモンド社）

①元素戦略プロジェクトのプログラムオフィサーが著した本で、「元素戦略」のねらいがわかるように書かれている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『未来を拓く元素戦略―持続可能な社会を実現する化学』（日本化学会編、化学同人）

①この元素戦略プロジェクトも含めて、化学分野からの「元素戦略」へのさまざまなアプローチが紹介されている。

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『材料特性と材料選択』（落合庄治郎他著、岩波書店）

① コメントなし

②田中庸裕／田中功（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点／京都大学構造材料元素戦略研究拠点）「No.35：元素戦略プロジェクト」

『量子コンピュータ』（竹内繁樹著、ブルーバックス）※

①光の不思議と、量子コンピュータについて書いた本です。今回の話に興味を持って頂いた方には、ご覧頂けたらと思います。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No. 36：光子のふしぎと量子情報科学」

『光と物質のふしぎな理論』（R.P.ファインマン著、釜江常好・大貫昌子訳、岩波書店）※

①ファインマン先生がノーベル賞を、朝永先生と共同受賞された量子電磁気学を、なんと数式をつかわずに説明した本です。私は学生の頃によんで、目からうろこが落ちる気がしたのを覚えています。

②竹内繁樹（京都大学大学院工学研究科）「No. 36：光子のふしぎと量子情報科学」

『金属間化合物入門』（山口正治・乾晴行・伊藤和博著、内田老鶴圃）※

①耐熱材料の中のエース、金属間化合物について平易に述べられている。

②乾晴行（京都大学大学院工学研究科）「No. 39：炎を制する－超耐熱構造材料」

"The Language Grid: Service-Oriented Collective Intelligence for Language Resource Interoperability" (Toru Ishida ed., Springer)

①展示する「言語グリッド」について、構想や原理、使われている技術を書いた本です。言語グリッドについてより詳しく知りたい方におすすめです。

②大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）「No.41：世界の言葉を繋ぐ「言語グリッド」」

『存在と時間』（マルティン・ハイデガー著、細谷貞雄訳、筑摩書房）※

①存在論の歴史を独特の記述のなかに凝縮させながら、その超克を企図した著作です。フランス現象学は、この著作との対決なしには語ることができません。

②服部敬弘（京都大学大学院文学研究科）「No.42：「ある」の謎―フランス現象学の挑戦」

『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（西芳実著、京都大学学術出版会）　※

①22 万人以上が亡くなったスマトラ島の巨大津波から 10 年。その被災地でどのように復興が進んできたかを、建物や制度の再建・復興だけでなく人々の心の復興に目を向け、10 年にわたって調査を続けた記録。「災害対応の地域研究」シリーズの第二巻。同シリーズ第一巻の『復興の文化空間学――ビッグデータと人道支援の時代』とともに、人文社会系の研究が被災地の復興や支援とどう関わるかを考えるのにも役立つ。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No. 43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』（山本博之著、東京大学出版会）※

①複数の民族や宗教が混在する状況で、各民族が独自の民族意識や言語・慣習を維持しつつ、全体で 1 つの国民を構成するというナショナリズムのあり方を、1963 年にイギリスから独立した北ボルネオ（現在のマレーシアのサバ州）について明らかにしたもの。第二次世界大戦による戦災を経験した北ボルネオの人々が社会をどのように再建・復興しようとしたかを、自分たちを世界にどう位置づけるかという点を中心に捉えた。

②山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）「No. 43：津波被災者からのメッセージを読み解け」

『遺伝子医療革命　ゲノム科学がわたしたちを変える』（フランシス・S・コリンズ著、矢野真千子訳、日本放送出版協会）※

①個人の遺伝子配列情報を知ることができるようになった現在の状況と未来をヒトゲノムプロジェクトのリーダーが分かりやすく解説している。

②眞田昌（京都大学大学院医学研究科）「No.45：遺伝子からみた老化とがん」

『民族植物学－原理と応用』（C.M.コットン著、木俣美樹男・石川裕子訳、八坂書房）※

①フィールドワークを行っている言語学者にとって、植物学は、とても密接な分野です。言語調査を通じて、また、植物語彙や植物利用を通じて言葉のルーツや言葉の移動、文化接触を知ることができます。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No. 47：言語多様性 vs.生物多様性」

『太平洋－東南アジアとオセアニアの人類史』（ピーター・ベルウッド著、植木武・服部研二訳、法政大学出版局）※

①祖先を同じくする、オーストロネシア語族の言語、台湾の原住民の言語、ニュージーランドのマオリ族の言語、アフリカ東海岸のマダガスカルの言語、イースター島のラパヌイ語など 2000 以上の島々の言語と人類の歴史について詳しく解説してあります。

②西本希呼（京都大学白眉センター／東南アジア研究所）「No. 47：言語多様性 vs.生物多様性」

『遺伝子図鑑』（国立遺伝学研究所『遺伝子図鑑』編集委員会編、悠書館）※

①とことん遺伝子のことに特化した図鑑です。普段の生活ではなかなか触れる機会の少ない遺伝や遺伝子の話で、難しいかなと考える方も多いかもしれませんが、図を見ているだけでも楽しめる一冊です。自分の体の中でこんなことが起きているなんて！目では直接見ることができない遺伝子のことを分かりやすく解説しているだけではなく、身近なものと比較していて、改めて人体の不思議を感じることができると思います

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『フィンランド理科教科書（生物編）』（M.ホロパニエン他著、鈴木誠監訳、山川亜古訳、化学同人）

①教育先進国フィンランドの中学校で使われている生物の教科書（日本語訳）です．ヒトの遺伝や生命に対する扱いが日本と大きく異なっていることに驚きます。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』（長谷川義史著、ＢＬ出版）※

①私たちはヒト遺伝リテラシー向上を目指しています．子ども向けの絵本だけれど、なかなか奥が深いです．「命は続いている」とか言葉だけではいまいちピンときませんが、自分とご先祖様の命はつながっているのだということを、「ひぃひぃひぃ・・・」と読み進めていくうちに実感できる内容になっています。ページが進む度に子どもたちに読み聞か

せるのが大変になってきますが、登場するキャラクターやイラストがどんどん変化していき、時代の変化も楽しむことができます。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』（草場一壽（作）、平安座資尚（絵）、サンマーク出版）

①ヒト遺伝教育はDNAヤ染色体を学ぶためだけではありません．サブタイトルにある「ヌチヌグスージ」とは沖縄の言葉で「いのちの祭り」と意味するとのこと。絵本冒頭の、ご先祖様のお墓の前に集まった家族らが、歌ったり踊ったりしながら感謝の意を伝えるシーンを指しているようです。絵本は途中にしかけがあり、命の広がりを視覚的に魅せてくれます。登場人物の表情が１人１人みんな違うのも見どころの１つ！自分の命と家族とのつながりをやさしく教えてくれる、とっても心温まる１冊です。

②和田敬仁（京都大学大学院医学研究科）「No.48：いのちのバトン―体験型ヒト遺伝教室―」

『物の本質について』（ルクレーティウス著、樋口勝彦訳、岩波書店）※

①2000 年以上も前にこんなことを考えていた人がいたのかと思えるような本です。当時支配的だった迷信的な考え方への挑戦状とも言える内容です。

②西村周浩（京都大学白眉センター）「No.49：日本でヨーロッパについて語る？」

『歴史としての生命』（村瀬雅俊著、京都大学学術出版会）※

①新たな生命哲学の創造を実践的に展開した、ある意味で体験の書である。

②村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所）「No.50：統合知－新たな学問の創成に向けて－」

座談会・本トークの登壇者からの推薦図書

お茶を片手に座談会「宇宙を見てゴカイを食べる？」

登壇者（所属）
【推薦図書ジャンル】
『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能
推薦コメント

登壇者① 古澤拓郎（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話（上・下）』（マーク・プロトキン著、屋代通子訳、築地書館）※

（推薦コメント）熱帯雨林を歩き回り、植物標本を集め、そこに暮らす人々と語り合う様子がいきいきと描かれ、自分もぜひそういうフィールドワークをしたいと思いました。研究とは何か、地域社会の　役に立つとはどういうことか、思い悩む姿にも感銘を受けました。

『EV Café 超進化論』（村上龍・坂本龍一著、講談社文庫）

（推薦コメント）中学から高校生のころに繰り返し読んで、学問ってオシャレでカッコイイと興奮しました。学　問というのは、つまらない受験勉強だけではないのだと知りました。この世界に憧れるきっかけの１つになりました。（ただし今読んだら、いろいろと反論したくなると思います。）

【若者にお勧めしたい本】

『百年の孤独』（ガブリエル・ガルシア＝マルケス著、鼓直訳、新潮社）※

（推薦コメント）一番好きな本です。高校時代に読んで、内容を深く理解したくなり、著者のマルケスやラテンアメリカ文学、さらにコロンビアやラテンアメリカの歴史や社会について、調べました。今思えば、地域研究への第一歩だったかもしれません。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『人類生態学』（大塚柳太郎他著、東京大学出版会）※

（推薦コメント）人間を生物としてみる視点と、社会的・文化的存在としてみる視点を横断しながら、人間と環境の関わりを研究すると、現代の様々な環境問題・社会問題に新たな光をあてることができます。そういう人類生態学の大学生向けの教科書です。読むたびに新たな発見があります。いまは大塚柳太郎ら編集版が流通していますが、絶版の鈴木継美ら編集版もおすすめです。

登壇者② 佐藤正典（鹿児島大学大学院理工学研究科）

【今ハマっている本】

『人類はどこから来て,どこへ行くのか』（エドワード・O. ウィルソン著、斉藤隆央訳、化学同人）※

（推薦コメント）基礎的な生物学の研究から人間の本性を洞察するという壮大で魅力的なテーマです。「理系」と「文系」の垣根などないのです。少々難しいですが「文系」の人にもこの進化生物学の視点をぜひ知ってほしいものです。

【若者にお勧めしたい本】

『生命は細部に宿りたまう』（加藤真著、岩波書店）※

（推薦コメント）日本列島の目立たない場所、地味な生物が、美しい写真と格調高い文章で語られます。日本がどれほど豊かな生物多様性に恵まれた国であることか、それが世界の中でどんなに稀なことであることか、そして、私たち日本人がそのことにいかに気づいていないことか。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『海をよみがえらせる―諫早湾の再生から考える』（佐藤正典著、岩波ブックレット）※

（推薦コメント）私の研究対象のゴカイ類がすんでいる干潟（美しい泥の世界）の大切さを、ぜひ多くの人に知っていただきたいものです。

『干潟の絶滅危惧動物図鑑―海岸ベントスのレッドデータブック』（日本ベントス学会編、東海大学出版会）※

（推薦コメント）干潟にすむ目立たない小さな生きものたち（貝やカニやゴカイなど）にも絶滅危惧種がたくさんいます。それぞれの専門家が愛情を込めて撮影した各種の写真が美しく、圧倒的です。ゴカイ類の絶滅危惧種も21種掲載されています。

登壇者③ 磯部洋明（京都大学宇宙総合学研究ユニット）

【今ハマっている本】

『亡命ロシア料理』（ピョートル・ワイリ、アレクサンドル・ゲニス著、沼野充義訳、未知谷）

（推薦コメント）本文より引用『おたまを持って鍋の前に立つとき、自分が世界の無秩序と闘う兵士の一人だという考えに熱くなれ』『日常生活と冷えてしまったマカロニを比較してみよう。そのどちらにも意味を与えるのは刺激だと、すぐに思いいたるはず。予期せぬ恋、トマトソース、危険な冒険、唐辛子、宝くじ、ニンニク』…かっこ良すぎる。

『ダンゴムシに心はあるのか』（森山徹著、PHP新書）※

（推薦コメント）自然界でダンゴムシを観察していては決して分からなかったであろう、ダンゴムシの「こころ」とは？

『闇の左手』（ル・グィン著、小尾芙佐訳、ハヤカワ文庫SF）※

（推薦コメント）人間が男女に別れていなかったらどうなるか？「ゲド戦記」の作者で文化人類学者を父に持つ著者が他の惑星に住む人々を通じて人類社会について考察した、ジェンダー論SF。これぞ宇宙人類学。

『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』（東田直樹著、エスコアール）

（推薦コメント）重度の自閉症で会話もできないが、文字盤を使って考えを綴る術を得た著者。世界の把握の仕方にこんなあり方があるのか、という人間精神の多様性を教えてくれる本です。

【若者にお勧めしたい本】

『サルなりに思い出す事など』（ロバード・サポルスキー著、大沢章子訳、みすず書房）※

（推薦コメント）「起きている間の時間の大半を他人…じゃなくて他ヒヒとのヒヒ関係に神経をすり減らすのに使っている」というヒヒ研究者が著者。アフリカ冒険譚としても楽しい。

『多様化世界』（フリーマン・ダイソン著、鎮目恭夫訳、みすず書房）

（推薦コメント）著名な物理学者であり、未来の宇宙文明を科学的かつ壮大に考察した人であり、穏やかで暖かいまなざしで科学と社会や宗教の関係を語る、著者フリーマン•ダイソンの世界観がよく表れている著作です。

『梅崎春生』（梅崎春生著、筑摩書房）※

（推薦コメント）一番最後にある「チョウチンアンコウについて」というほんの3ページほどの小品にて、著者に「この瞬間のことを考えると、私は何か感動を禁じ得ない。どういう感動かということは、うまく言えないけれど

も」と言わせた瞬間のことを、ぜひ読んで欲しいです。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『宇宙人類学の挑戦』（岡田浩樹・木村大治・大村敬一編、昭和堂）

（推薦コメント）人類学者と宇宙研究者が出会って始めた、宇宙時代の人類について考える新しい学問のキックオフとなる本です。

『最新画像で見る太陽』（柴田一成・大山真満・浅井歩・磯部洋明著、ナノオプトニクスエナジー出版局）※

（推薦コメント）ダイナミックに活動する太陽の美しい写真が、大学院のゼミで使えるくらいマニアックな解説とともにお楽しみ頂けます。

お茶を片手に座談会「震災映像の想像力と市井の人々」

登壇者（所属）

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

登壇者①田中傑（京都大学防災研究所）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『東京の空間人類学』（陣内秀信著、筑摩書房）　※

（推薦コメント）東京の現在（80年代）のまちなみを来歴に即して紹介し、その歴史的・地形的な文脈を解読する本です。都市空間の持つ歴史的な文脈に対する関心を抱くきっかけとなりました。

『都市叢書　東京都市計画物語』（越沢明著、日本経済評論社）

（推薦コメント）東京のまちなみの形成を、都市計画行政の担当者の立場から描いた本です。公的な資料（公文書、事業誌）や関係者へのインタビューによって調査・研究を進めています。まちなみを変える力に関心を持つきっかけとなりましたが、わたし自身はその力のもとで一般のひとびとがどのように行動するのかに関心を持つにいたりました。

【若者にお勧めしたい本】

『青きドナウの乱痴気　ウィーン 1848年』（良知力著、平凡社）　※

（推薦コメント）1848年革命に関わる大量の資料を古書店その他で掻き集めて、革命騒ぎの担い手たち、革命騒ぎの進行過程などを生々しく描いた本文はもちろん素晴しいですが、そのあとがきは良知さんの絶筆と言われています。そこに記された彼の若き日の研究生活の断片をときどき読み返します。

『麦熟るる日に』（中野孝次著、河出書房新社）※

（推薦コメント）受験生時代、通信添削講座の現代文の問題で目にし、後日送られていた解説文で書名を知ってすぐに購入しました。自分自身には不相応なのではと感じていた学問の世界へのあこがれがそのまま描かれていたので、受験会場にも持ち込むほど心酔しました。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『日本案内記』（鉄道省編、博文館）※

（推薦コメント）古い旅行案内は、その土地、その土地の本来の力を記録しています。地勢、気候、地場の建材を用いたまちなみ、それらと関係の深い名産品・歴史的な名所など。交通網の発達、災害（自然災害、戦災）、「進歩主義」などによって失われた（あるはず/あったはずの）資源を想像することができます。

"Baedeker（ベデカー）"　※

（推薦コメント）日本に比較して、（おどろくほど）古いものが残っているヨーロッパ諸国、諸都市をめぐるガイドブックです。1880年代に登場して以来、現在にいたってもなお、ドイツの書店の店頭にならんでいます。その地図を頼りにまちあるきをしながら、古い舎がショッピングセンターに転用され、堡塁の跡が公園に改められたプロセスを眺めてあれこれ考えます。

登壇者②大澤浄（東京国立近代美術館フィルムセンター）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『映画千夜一夜』（淀川長治・山田宏一・蓮實重彦著、中央公論社）※

（推薦コメント）地方都市に住んで、当然インターネットは無く、近所のレンタルビデオ店もそれほど品揃えがあるわけでも無くという時代、書店で映画好きの中学生の目に留まったのがこの分厚い本。聞いたこともない映画タイトルの数々とそれらに向けられる熱のこもった言葉が、映画の広大な世界への渇望を引き起こしました。

『映画 視線のポリティクス』（加藤幹郎著、筑摩書房）　※

（推薦コメント）映画とより深く付き合っていくためには、映画を好きなだけでは不十分だということが分かってきた学生時代。映画と共にあった歴史を、社会を、制度を知ることが、自らの眼差しをも変えました。

【今ハマっている本】

『ミシシッピの生活（上、下）』（マーク・トウェイン著、吉田映子訳、彩流社）※

（推薦コメント）自身、ミシシッピ河の水先案内人だったトウェインが、河で暮らす人々を描いた本。水上生活から見た、アメリカの多様な顔や歴史を垣間見ることができる。

『チーズと文明』（ポール・キンステッド著、和田佐規子訳、築地書館）※

（推薦コメント）面白く、かつ世界史の勉強ができてしまう本。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『関東大震災の想像力』（ジェニファー・ワイゼンフェルド著、篠儀直子訳、青土社）※

（推薦コメント）今年８月に刊行されたばかりの関東大震災をめぐるイメージに関する刺激的な研究書。

『ドキュメンタリーの海へ 記録映画作家・土本典昭との対話』（土本典昭・石坂健治著、現代書館）

（推薦コメント）映画史上類のない長期間にわたる、撮影対象との相互関係によって、ユニークなドキュメンタリーを撮り続けた映画作家へのインタビューを中心にまとめた本。フィクションであれノンフィクションであれ、映画と付き合う上で大切なことを教えてくれる。

登壇者③小川直人（せんだいメディアテーク）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『夏の朝の成層圏』（池澤夏樹著、中央公論社）※

（推薦コメント）小学生のときに読んで、今もたまに読む本。今の仕事を選ぶきっかけになった本、あるいは、出来事というのは、案外とこれくらい遠いところにあるのではないかと思います。自覚できるけれど、直接関係があるとは思えない経験こそ、きっかけと言うにふさわしい。

【今ハマっている本】

『ヴォイニッチホテル』（道満清明著、秋田書店）

（推薦コメント）むかしからあまりマンガには興味がなく、偶然手にするくらいでしか読まないのですが、近年読んだ中で最も印象深いもの（まだ連載中のはず）。人生はブルースで、ブルースにはユーモアがつきまとい、つまり、どんなひどい人生にもユーモアがあることを知らされる作品。この作家について詳しい人がいたら教えてほしい。

【若者にお勧めしたい本】

『パスタ宝典』（ヴィンチェンツォ・ブオナッシージ著、西村暢夫他訳、読売新聞社）※

（推薦コメント）学生時代に大学図書館で見つけて不思議に思っていた本で、毎日 1 種類ずつ作り続けても 4 年間かかる、パスタのレシピ集。だれか卒業までに挑戦してほしい。もちろん、3 食パスタにしたり、一度に何種類か作って友達や恋人に振る舞えば、もっと短い期間で作り終わります。ちなみに、「ソース法典」という姉妹本もありました。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『伝わるデザインの基本―よい資料を作るためのレイアウトのルール』（高橋佑磨・片山なつ著、技術評論社）

（推薦コメント）世界からマイクロソフト製品に入っている WordArt が消えてしまうことを祈念してやまない私ですが、現実はそう甘くはなく、絶望的にわかりにくいプレゼン資料を目にする日々です。デザインはプロのデザイナーのものだけにあらず。どんな優れた研究も伝わらなければ意味がないわけですから、研究者こそ重要なスキルでしょう。書いているのが進化生態学の研究者である点も興味深い。

『ゴダール的方法』（平倉圭著、インスクリプト）※

（推薦コメント）ジャン＝リュック・ゴダールといえば、多くの人にとって強烈な催眠作用をもたらす作風ながら、その作品に言及せずにはいられない不思議な力をもった映画作家ですが、彼に関する無数の書物のなかで、特に印象深いもの。読んだ後に作品が別のものにしか見えなくなるというのが良い映画批評のひとつの尺度ではないでしょうか。

『イメージ・リテラシー工場―フランスの新しい美術鑑賞法』（ジャン＝クロード・フォザ他著、犬伏雅一他訳、フィルムアート社）※

（推薦コメント）「学ぶ」ということはもっと自由で良いのではないかと常々思っているのですが（小学校くらいから）、新しいタイプの文化施設で、映像文化の専門家として仕事をすることになって試行錯誤していくなかで参考になった本。授業の国際比較としてもおもしろい。

『月刊佐藤純子』（佐藤純子著、メディアデザイン）

（推薦コメント）友人に本屋で売るような本をつくりたいと相談され、気楽な気持ちで手がけたもの。企画／編集／書店流通まで、やってみたらできた。学び、特に、メディアに関することというのは、「やってみたら案外できるかもしれない」という意識を持ことだと思っているので、人に言うばかりではなく実践してみた次第。

『映画への不実なる誘い』（蓮實重彦著、NTT 出版）※

（推薦コメント）せんだいメディアテークで 2002 年から続けたレクチャー・シリーズを本にしたもの。学生時代に本を手にしてみたものの難解で挫折した人とまさか一緒に仕事をすることなろうとは思っていませんでしが、講演はべらぼうにおもしろい。ということは、蓮實重彦という人は文章が下手なのではないか（話すことに比べては）という仮説を立ててみましたが、怖くて本人には言えませんでした。

お茶を片手に座談会「コトバのデータベースが社会を変える？」

登壇者（所属）

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

登壇者① 家入葉子（京都大学大学院文学研究科）

【若者にお勧めしたい本】

『文科系ストレイシープのための研究生活ガイド　心持ち編』（家入葉子著、ひつじ書房）

（推薦コメント）研究生活の初期段階で直面しそうな問題を、心理的な側面に焦点を当てながら解きほぐしてみました。気軽に短時間で読むことができます。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『英語の歴史―過去から未来への物語』（寺澤盾著、中公新書）

（推薦コメント）英語にはさまざまな不規則性がありますが、英語を学ぶ際には、これをそのまま憶えなければならないことが少なくありません。近年、英語の歴史を理解して、納得しながら英語学習を進めることの重要性が強調されるようになりました。本書はそれを助けてくれる１冊です。

『聖書でたどる英語の歴史』（寺澤盾著、大修館書店）※

（推薦コメント）異なる時代の英訳聖書を読みながら英語の歴史と変化を味わうための本です。『英語の歴史』と合わせてお薦めしたい本です。

『ベーシック英語史』（家入葉子著、ひつじ書房）

（推薦コメント）5 世紀の半ばから 1500 年以上の時間をかけて変化してきた英語の歴史を、簡単に理解できるようにまとめました。短時間で英語史の流れをつかめるとともに、英語学習者なら誰もが疑問に思っていたような事柄についても簡潔に答えてくれるはずです。

『旅するニホンゴ―異言語との出会いが変えたもの』（渋谷勝己・簡月真著、岩波書店）※

（推薦コメント）海外に渡った日本語を扱った本です。日本語を起点に言語接触の実態を学ぶことで、言語の変容をより身近な問題と考えることができるかもしれません。

登壇者②佐藤恵子（京都大学医学部付属病院臨床研究総合センター）

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

“Fundamentals of Clinical Trials 4th ed.”　(Friedman L M., Furberg, C D., DeMets, D L., Springer)

（推薦コメント）私が臨床試験を初めて学んだのは 1990 年頃、米国のノースキャロライナ大学の公衆衛生学部です。この本はそこで教科書として使用されていました。とても良い本ですので、教員の Ed Davis 先生に「なぜこの本を選んだのか」とたずねたところ、「ペーパーバックスで学生が買いやすいから」というお返事で、ずっこけました。

『患者の権利』（アナス ＧＪ著、谷田憲俊監訳、NPO 法人患者の権利オンブズマン編訳、明石書店）※

（推薦コメント）医療では、洋の東西を問わず、「病気のことを熟知しているのは医師なので患者は医師に従っていればよ

い」というやり方が一般的でした。しかし、患者に施される医療については患者本人が決めなくてはならず、それは患者の権利であり、医師は患者の決定を尊重しなくてはならない、という180度違う考え方をわかりやすく述べています。

【今ハマっている本】

『スモールイズビューティフル』（シューマハーAF著、小島慶三・酒井懋訳、講談社）

（推薦コメント）経済学者のシューマハーによる1973年の著作で、科学や技術と人間のありようを述べています。現在は、当時のシューマハーが予言したとおりのよくない状況になっているのですが、だからこそシューマハーの卓見を見直す時期ではないかと思います。

『137億年の物語―宇宙が始まってから今日までの全歴史』（ロイド C.著、野中香方子訳、文藝春秋）※

（推薦コメント）私は子どもの頃、出来事と年号を覚えるだけの「歴史」が嫌いでしたが、歴史好きの兄が語る人の営みとしての物語は面白くて、兄の語りのような本があったらいいのにと思っていました。この本は、生物の誕生から現在までの歴史がひとつながりになっていて、タイムマシンに乗って好きな時代の人間の営みを眺めているような楽しさがあります。

【若者にお勧めしたい本】

『夜と霧』（フランクル VE.著、霜山徳爾訳、みすず書房）※

（推薦コメント）ナチスの強制収容所という極限の状態におかれた精神分析の学者フランクルが人間を洞察した記録。人間とは、人生とは、愛とは、尊厳とは…を静かに問いかけています。読むたびに新しい発見がありますので、まずは若い時に是非一度読んでみてください。

『アルジャーノンに花束を』（キイス D.著、小尾芙佐訳、早川書房）※

（推薦コメント）知的障害のあるチャーリーが、とある手術を受けるのですが、そこで得たもの失ったもの、そして…という物語。生きること、障害を持つこと、人とのかかわりなど、多くのことを考えさせられます。演劇や映画にもなっているのですが、本で読むことをお勧めしたいです。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『マンガで学ぶ生命倫理』（児玉聡・なつたか著、化学同人）

（推薦コメント）生命倫理学は、人の生老病死を扱う学問ですが、学者だけが考えることではなく、一人ひとりがたとえば「自分は人から臓器をもらって生きたいか」を考える必要があります。縁起が悪かったり考え方もわからなかったりしてハードルが高いのですが、この本は高校生を主人公にして一緒に考えることができますので、若い人にお勧めしたいです。

『宇宙怪人しまりす 医療統計を学ぶ』（佐藤俊哉著、岩波科学ライブラリー）※

（推薦コメント）日本では、「コレを飲んだら病気が治った、ゆえにコレは病気に効く」というような話が巷にはびこっておりますが、治療の有効性を評価するには、医療統計の知識が必要です。数式なども使いますのでじんましんが出そうになりますが、この本は、算数や数式は嫌いだけど、地球を征服しに来た「宇宙怪人しまりす」と一緒に、病気や健康に関する基本的な考え方を学ぶことができます。

研究者の本棚ミニトーク「お伽草子の世界」

登壇者 金光桂子（京都大学大学院文学研究科）

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『源氏物語論』（清水好子著、塙書房）※

（推薦コメント）学部生の頃に読み、作品に込められた作者の思いを客観的な証拠に基づいて解き明かすという、文学研究のおもしろさを知った本です。

【若者にお勧めしたい本】

『文車日記―私の古典散歩』（田辺聖子著、新潮文庫）※

（推薦コメント）ただただ古典文学が愛しくてたまらない－という気分に浸れます。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『慶應義塾図書館蔵 図解御伽草子』（石川透著、三弥井書店）※

（推薦コメント）奈良絵本・絵巻の美しさをカラー図版で堪能できます。

『京都大学蔵むろまちものがたり』３巻・１０巻（臨川書店）※

（推薦コメント）今回のトークで紹介する『しほやきぶんしやう』『はちかづき』が収載されています。

もっと知りたい！

研究者の本棚　「人文・社会科学者（地域研究者）の本棚」

（京都大学地域研究統合情報センター　山本博之）

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

推薦コメント

【小学生の時に読んだ本】

『光・音・熱の魔術師　（なぜなぜ理科学習漫画）』（若月てつ著、集英社）

小学生の頃に何度も繰り返し読んだ本。家の中や道端にある身近なものを題材に、世の中の物事はそれぞれ仕組みがあって動いているということを漫画でわかりやすく解説したもの。

『文部省で決まった早わかり国語』（江守賢治著、新東京出版）

小学校卒業の頃に買って、中学生の頃に繰り返し読んだ本。いろいろな言葉を漢字でどう書くか、漢字をどう書くかという決まりを手書きで解説してくれた本。小学校の国語で漢字を習ったけれど、漢字の書き方の決まりは変わることがあることや、決まりにはどの範囲までなら逸脱してもよいという許容の形があることを知った。決まりを説明する本なのに、決まりに対する疑問や漢字の美醜に対する著者の個人的判断がときどきあらわれるのも面白い。

【中学・高校生の時に読んだ本】

『若き数学者のアメリカ』（藤原正彦著、新潮文庫）※

高校時代、1 年間のホームステイ留学中に読んだ本。自分が日本人であることを忘れて現地社会の一員になるぞという意気込みで留学したが、留学先は多民族社会のマレーシア、しかもホームステイ先は民族的マイノリティで、「現地社会の一員になる」というのはどの人たちと同じになることなのか悩んだ。本書で「アメリカでは日本人らしく振舞うのが現地社会に馴染むことだ」と読み、その意味を考えることが後の研究につながった。

『殺される側の論理』（本多勝一著、朝日文庫）※

子どもの頃から常識や慣例となっていた考え方や行動の一部は、実は米国の常識や慣例をそのまま持ち込んだものだという見方を本書で知った。ローマ字で名前を書くときに姓・名ではなく名・姓の順に書くこと、数字を書くときに 4 桁ごとではなく 3 桁ごとにカンマで区切ることなどをはじめ、1 つ 1 つの言葉をどう書くかに書き手の意識が反映されるという考え方を知り、発せられた言葉の行間を読む習慣が身についた。

【大学学部生の時に読んだ本】

『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』（佐藤健志著、文藝春秋）※

子どもの頃から好きだったウルトラマンなどのテレビ番組や映画の背景に、アメリカの傘の下で平和を享受しているという日本社会の意識などが読み解けるという本。何気ない大衆娯楽でも分析の仕方しだいで時代性や社会思想を読み解くことができることに驚き、それまで考えもしなかった自分の意識を当てられたことやその手際の鮮やかさに驚く一方で、その読み解きに違和感が残り、別の読み解き方ができないかとずっと考えている。

『愛するということ』（エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳、紀伊国屋書店）※

愛するということは状態ではなく意志であり技術であるという考え方を知った。地域研究とは研究　対象への愛であるという地域研究の考え方のもととなった。

『風の谷のナウシカ』（宮崎駿著、徳間書店）※

アニメ映画が有名だが、漫画には映画では描かれなかった後半部分が描かれている。私たちが生き　るこの世の中には矛盾や穢れがあるが、そこに生きる私たちもみなその矛盾や穢れを一部で身にまとっており、すべて浄化した理想の世界を作ってもそこで私たちは生きていけない。いま生きている人々や命を犠牲にしてでもすべてが浄化された世界を作るべきだという考え方を明確に否定し、現実の世界の中で矛盾や穢れを身にまとった存在として生きていく覚悟を力強く描いた本。

【大学院生の時に読んだ本】

『ためらいの倫理学―戦争・性・物語』（内田樹著、角川書店）※

大学院在籍中に出会い、常勤職に就くまでによく読んだ本。任期が切れて職場が変わるたびに持っ　ている本の一部を処分しなければならなくなっても最後まで手元に残そうと思った１冊。いろいろな人々が集まって成り立つ社会では、ものごとの善悪を語るだけでは相手と話が通じないことがあり、善悪の判断を他人が納得できる形で説明しなければならず、それをいくつかの例で実際に示して見せた本。書かれている内容も興味深いが、他人に納得してもらう技術という意味でも興味深い。

【お勧めしたい本―世の中編】

『こころのふしぎ　なぜ？どうして？』（村山哲哉監修、高橋書店）

「こうすべき」「これはだめ」と理解はしていてもそのことがなかなか納得できずに適切に行動できないという経験は誰にもあるだろう。本書は、それを善悪や正邪からではなく人間の心の不思議という観点から解き明かし、適切に行動する道を探る。しかも、子どもにもわかるように説明する工夫が凝らされている。児童向けの本だが、大人になってからも読み返したい一冊。

『イケズの構造』（入江敦彦著、新潮社）※

イラストも面白い京都紹介の本。京都（人）について鋭く突き放した筆致でいろいろ書かれているけれど、いずれも京都（人）に対する広い知識と深い愛情があってこその内容。学術書ではなくても、ある意味で地域研究の本。関東出身の私が京都に来たばかりの頃に読んだ京都本の中で特に印象に残っている 1 冊。でも、もしかしたら本書をまじめに読みすぎたために私の京都（人）に対するイメージが強く作られてしまったかもしれない。

【お勧めしたい本―研究書編】

『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳、NTT 出版）※

1990 年代頃の大学生の必読書という雰囲気があった。中身をよく読まずに「国民とは幻想の共同体である」という主張だと誤読されたりもしたが、「正真正銘」のナショナリズムは排他的ではなく自己解放をもたらす原理であるとしてナショナリズムを肯定的に捉えている。21 世紀に入って世界各地で排他的なナショナリズムが勢いを増しているように見えるが、それでも本書の議論はなお有効なのか、今こそ改めて考えてみたい。

『ハーフィズ詩集』（ハーフィズ著、黒柳恒男訳、平凡社）※

読んでおもしろい古典。14 世紀のペルシャの詩人による詩集。中世のイスラム宮廷を背景にした詩集だが、全編に酒と美女が溢れている。マレーシアの映画にも引用されている。

『ベトナム人共産主義者の民族政策史―革命の中のエスニシティ』（古田元夫著、大月書店）

現地語を駆使して可能な限りあらゆる文献を参照して地域像と世界像を組み立てた「学者の仕事」。　ベトナムに自由に行き来できなかった頃にベトナム研究を行った著者は、ベトナムの友人から小包が届くと、中身を包んでいた新聞紙を読んで現地の様子を知っていたという。

『対立と共存の国際理論―国民国家体系のゆくえ』（山影進著、東京大学出版会）

スタイリッシュな学者の仕事。章ごとに変わる手さばきの鮮やかさ。学術書の扉に小説の一節を引用する遊び心。所収論文の本文に出てくる駄洒落。そして抽象画のようでテーマと密接に関わっている表紙のデザイン。ただし、現地社会にのめり込まない風を装いながら、実は世界と人類社会の行く末を気にかけている様子が行間から伺える。

【お勧めしたい本―研究作法編】

『論文作法』（ウンベルト・エーコ著、谷口勇訳、而立書房）

学術論文を書くための指南書。論文執筆の具体的な方法もわかりやすく解説してくれているが、論文とは何か、研究とは何かを読み物風にして見せてくれる。学術論文の執筆を仕事にしようとする人にとって最初に読むべき必読書の１つ。

『社会学的想像力』（ミルズ著、鈴木広訳、紀伊國屋書店）※

事件や事故があったとき、その直接の当事者の原因を個別に追究する態度ではなく、その事件や事故を手がかりに社会のあり方を考えるという態度が社会学的想像力だとしたら、調査研究する側とされる側、見る側と見られる側、情報発信する側と受け取る側の境界がぼやけて相互乗り入れの部分が大きくなっている現代世界では、事件や事故を手がかりに社会のあり方を考える「地域研究的想像力」をどう構想するのか。

『知の虚構』（坂奈玲著、三一書房）　※

研究は孤独な作業だけれど、研究活動は職場や家庭や地域社会の中で場所を得ることで進めることができるし、研究成果も社会の中に置かれてはじめて意味を持つ。

【お勧めしたい本―東南アジア編】

『人間の大地（上・下）』（プラムディヤ・アナンタ・トゥール著、押川典昭、めこん）※

海外旅行が手軽になったせいもあって東南アジアはずいぶん身近になった。しかし、一方的に親近感を抱いても、東南アジアの人々が日々何を考えているかがわかるわけではない。それを補うには現地の小説を読むのがいい。本書とその続編の『すべての民族の子』や『足跡』は、オランダによる植民地支配下のインドネシアが舞台になっているが、独立後の現在のインドネシア社会にも通じるものがある。

『マレー蘭印紀行』（金子光春著、中央公論社）※

太平洋戦争の直前の時期に東南アジアを訪れた詩人の紀行文。現地の日本人社会を渡り歩き、日本人を含む現地社会の様子を冷めた目で鋭く描いている文章を読んでいると、「上から」「下から」の目線といった単純な見方ではなく、自分がよそ者であることを自覚した上で現地社会とどう付き合うのかを考えさせられる。

『東南アジアを知る事典』（桃木至朗ほか編、平凡社）※

事典だけれど読み物としてもおもしろい。日本の東南アジア研究者が総力を結集して刊行した本。（自身が担当した項目を含めて）東南アジアや個別の研究対象に対する書き手の思いが垣間見える項目が少なくない。

『サンダカン八番娼館』（山崎朋子著、文藝春秋）※

日本と東南アジアの関わりを知るための必読書の１つ。ほんの少し前の時代まで日本からアジア各地への出稼ぎがあった。ボルネオ島（現在のマレーシア・サバ州）のサンダカンで働いていた日本人女性たちの人生の聞き書き。彼女たちの墓は今でもサンダカン市の丘に海に面して立っており、私もサンダカンを訪問するたびに訪れている。

【お勧めしたい本―災害対応編】

『噴火のこだま―ピナトゥボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』（清水展著、九州大学出版会）

自分の研究対象が突然大きな災害や事故に巻き込まれてしまったとき、研究者はどう関わるのか。被災社会に寄り添いつつ、外部者として、そして研究者として復興過程をともに歩み、その結果を記録して世界に共有する。研究対象地域の事情に通じ、何年も何十年もその地域に関わり続ける地域研究者だからこその仕事であり、「災害対応の地域研究」の源流。

『被災地デイズ』（矢守克也編、弘文堂）※

災害が起こると、ふだんの常識では考えられない問題がいくつも発生し、次々と判断していかなければならない。そのためには、災害が起こったらどんなことが起こりうるのか、どんな判断が必要になるのかを、過去の災害から例をとって、災害が起こる前に考えておく必要がある。過去の災害の経験から将来の災害への対応のしかたを考えるための練習帳。引っ越し祝いや新築祝いにぜひ。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』（山本博之著、東京大学出版会） ※

自身の博士論文をもとにした本。複数の民族や宗教が混在する状況で、各民族が独自の民族意識や言語・慣習を維持しつつ、全体で 1 つの国民を構成するというナショナリズムのあり方を、1963 年にイギリスから独立した北ボルネオ（現在のマレーシアのサバ州）について明らかにしたもの。第二次世界大戦による戦災を経験した北ボルネオの人々が社会をどのように再建・復興しようとしたかを、自分たちを世界にどう位置づけるかという点を中心に捉えた。

『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（西芳実著、京都大学学術出版会）※

22 万人以上が亡くなったスマトラ島の巨大津波から 10 年。その被災地でどのように復興が進んできたかを、建物や制度の再建・復興だけでなく人々の心の復興に目を向け、10 年にわたって調査を続けた記録。「災害対応の地域研究」シリーズの第二巻。同シリーズ第一巻の『復興の文化空間学――ビッグデータと人道支援の時代』とともに、人文社会系の研究が被災地の復興や支援とどう関わるかを考えるのにも役立つ。

『復興の文化空間学：人道支援とビッグデータの時代』（山本博之著、京都大学学術出版会）※

自身の 9 年間の研究をまとめたもの。インターネットを使えば誰でも家や職場にいながらにして世界中の情報を手に入れることが可能となった時代に、あらためて情報の読み解き方を考えた本。「災害対応の地域研究」シリーズ第 1 巻。

『地域研究』第 12 巻第 2 号（「地域研究方法論」特集号）（昭和堂）

「地域研究とはどんな学問なのか。」一般の人からも、他の分野の研究者からも、そしてときには地域研究者自身からもしばしば問われるこの問いに対して、調査のしかたや論文の書き方ではなく、地域研究の構えについて書いた特集。研究者になるかどうか、地域研究を志すかどうかにかかわらず、現代世界に生きる人にぜひ読んでもらいたい本。

『地域研究』第 13 巻第 2 号（「混成アジア映画の海―時代と世界を映す鏡」特集号）（昭和堂）

日本を含むアジア 31 か国を対象に、映画の専門家ではなく地域の専門家が映画を紹介し、映画を通じて地域を紹介した本。デジタルカメラやインターネットの発達などによって個人による映像の発信が容易になった時代には、世界規模で相互理解を助け、誤解を防ぐための映像のリテラシーが必要。映画の読み解きは実社会の理解も助ける。

アカデミックデイ開催後、ショップルネ書籍コーナーにて
「研究者の本棚」関連コーナーを設置します！（場所：京都大学西部生協会館ルネ１階）

後援：京都大学生活協同組合、協力：京都府立図書館、京都大学附属図書館